

児童・生徒の社会福祉意識

村 上 尚 三 郎

社会福祉に関する基本的考え方を義務教育の課程から、子どもなりに、彼らの発達に即したかたちではっきりもてるような人間づくりを今日の学校教育に期待する。この期待感の背景には、社会福祉の対象が時代の進展とともに拡大され、いまや国民福祉的な視野が確立されるようになってきた近年の社会情勢がある。つぎに、社会福祉の向上は、たんに高等教育機関等において社会福祉の専門者を育成するだけにとどまらないで、より巨視的に、社会福祉に対する国民的理解の質的拡大深化、いいかえるならば社会福祉の国民的土壌づくりを志向する必要が、究極において教育の機能（可及的に初期の段階における）に求められなければならないからである。

義務教育課程における福祉教育については、これまでに、

- 「小中学校における福祉教育」（児童学——学文社——）昭，46，2
- 「義務教育課程における福祉教育」（仏教大学研究紀要第55号）昭，46，3
- 「福祉教育についての提言」（仏教大学社会学部論叢第6号）昭，47，9

などで拙考を提示してきた。

福祉教育は、いわゆる社会福祉の機能を、例えば子どもの身近なものから同心円拡大的に順次学習するというような、特別のカリキュラムを構成してその枠組みの中で展開するものでないことはいうまでもないが、子どもたちが社会福祉に対してどれ程の関心や意識をもっているかを知ることが福祉教育の前提として経なければならない作業であると考える。

今回の調査は予備的試行調査の域を出ないものであるが、子どもの社会福祉に対する経験領域や問題意識の所在ならびに考え方の傾向性などを概括的に把握することをねらいとして、調査の視点をつぎの6項目に集約して設定した。

I 社会福祉に対する感性的認識

——社会福祉のことばから想起されるイメージ，生活の中における社会福祉の直覚的な内容とその類型——

II 社会福祉に対する学習意欲

——ある教科学習をととして，社会福祉を学習することの必要の有無——

III 「社会福祉」学習テーマ

——社会福祉の学習想定時における学習テーマの設定，社会福祉を学習する問題意識の質と量——

IV 「施設訪問についての意見」に対する態度

——老人ホーム訪問の希望意見に対する態度の自己決定，具体的行為に関する参加の意欲——

V 社会福祉施設・機関に対する認識

——社会福祉資源への関心度，地域社会における既存資源へのそれ——

VI 老人・障害者の住みよい町実現への方策

——福祉的郷土への志向における福祉的連帯意識の所在——

調査は昭和51年7月中旬に行ない（学校委嘱），その対象として小学校は広島市近郊都市部A町（人口約48000人）の2校，島しょ部B町（人口約4700人）の5校，中学校は同上都市部A町の1校を選んだ。

調査対象児童生徒は何れも最高学年の小学校6年生521名，中学校3年生254名，内訳は，小学校A町男子219名，女子204名，計423名，B町男子39名，女子59名計98名，合計521名。中学校A町男子118名，女子136名，計254名。調査の方法は質問紙法によった。

因みに社会福祉資源は，都市部A町に児童遊園，精神薄弱児施設，養護老人ホーム各1，保育所5，島しょ部B町には保育所3がある。

本調査結果を概観すると，調査に対する反応は予測に反して全般的に低い。これはひとつに社会福祉の用語そのものに多くの子どもたちが語意上の抵抗を感じたであろうことを察知し得る。

批判的な見解をとれば，社会福祉に対する感覚や経験の乏しさ，とりわけ教科学習（主として社会科），道徳，特別活動，学校行事などをとおして，基本的人権尊重にかかわる「社会福祉的なものの見方・考え方」の思考過程・訓練，社会生活や将来に向けての実践的態度の形成化などが，教育諸活動の中に意図的にとり入れられないために，子どもなりの「社会福祉観」が定立しなかったり，かりにとり入れられたとしても浅薄であったりすることがあげられるだろう。

すべての学習素材の中に社会福祉が十分に入りこめない要素を，今日の学校教育が体質的にもっているとすれば，子どもの生活と社会福祉との間に心理的懸隔が招来されるのも必然であると推論したい。

反応をみていくとわかるように，小学校と中学校とでは逆な結果，現象傾向が示され，子どもの社会的意識・関心の発達の原則はくつがえされている面のあることも否定できない。いっぽう，部分的ではあるが社会福祉に対する子どもの鋭い感覚や意識も注目にあたいする。

以下，調査項目を追って考察をすすめてみたい。

〔I〕 社会福祉に対する感性的認識（質問形式…あなたは「社会福祉」ということばを聞いて，どんなことがらを思いうかべますか。じゅんばんに3つあげてください。）

この結果は表1にみるとおりである。小学校，中学校ともに反応は18の類型にまとめら

れたが、各類型についてその具体的反応（認識内容）はどのようなものであったかを小学校についてみると、

援助・保護（おとしよりの世話をするーやさしく、たいせつに——、からだの不自由な人

表1 社会福祉に対する感性的認識

小 学 校			中 学 校		
類 型	実 数	%	類 型	実 数	%
1 老人ホーム	94	17.8	1 老人ホーム	61	22.9
2 からだの不自由な人	69	13.1	2 期待・問題解決	33	12.4
3 援助・保護	51	9.6	3 からだの不自由な人	26	9.7
4 施設・設備	46	8.7	4 施設・設備	25	9.4
5 社会的有用	41	7.8	5 社会保障	19	7.1
6 社会的弱者	38	7.2	6 老人	15	5.6
7 老人	36	6.8	7 社会的弱者	14	5.2
8 社会保障	34	6.4	8 社会的有用	12	4.5
9 募金活動	15	2.8	9 援助・保護	11	4.1
10 観念的把握	15	2.8	10 募金活動	10	3.8
11 福祉の推進	13	2.5	11 観念的把握	10	3.8
12 同情的感覚	10	1.9	12 社会的貢献	10	3.8
13 生活保護	10	1.9	13 同情的感覚	4	1.5
14 社会的貢献	9	1.7	14 生活保護	2	0.8
15 自己との関連	9	1.7	15 自己との関連	2	0.8
16 国・自治体	7	1.3	16 国・自治体	2	0.8
17 期待・問題解決	6	1.1	17 福祉の推進	2	0.8
18 その他	26	4.9	18 その他	8	3.0
計	529	100.0	計	266	100.0

を助ける、生活にこまっている人を助ける、など)

社会的有用（社会福祉はいいものだと思う・たいせつ・ありがたい、人々のために役だつ、からだの不自由な人たちが安心してらせる、こまっている人のくらしがよくなるしくみなのでよいと思う、など)

社会的弱者（母子家庭・親のない子、こまっている人・かわいそうな人、失業者・働けない人、身よりのない人々、知能がおくれている人、など)

社会保障（保けん、社会保障、老人年金、身障者医療補助、老人の医療費無料化、児童手当、母子手当、など)

募金活動（赤い羽根共同募金、まずしい人・からだの不自由な人にお金・寄付、えはがき、など)

観念的把握（みんなが幸せになるために助けあい、しんせつ、「ゆりかごから墓場まで」のことは、すべての生活部面、社会の幸福、など)

福祉の推進（いまの福祉費用は少ないと思う、社会福祉をもっとふやせばよいと思う、いまのようではよくないのでどうかすればよいと思う。まだまだお金を使う必要がある、など）

同情的感覚（からだの不自由な人はかわいそう、老人はかわいそう、かわいそう、など）
生活保護（生活費や義務教育を受ける費用をだしている、生活にこまっている世帯に生活費や教育費をだす、困っている老人や病気などの人たちの生活を保障する、生活扶助、生活保護、など）

社会的貢献（社会奉仕・人によりことをしてあげる・障害者をみまう、社会につくす人々の強さ・身障者を守ろうとする人、実行する人はえらいと思う、など）

自己との関連（児童福祉センター、児童公園、交通遺児、やれるときがあったらやってみたい、ぼくが年をとったときのことを考えたら安心、ぼくたちが困ったときなどのよき話し相手・よき協力者、など）

国・自治体（国や県市町村が人民を幸福にしようとしているようだ、生活に困る人々をなくすための国のしごとは年々ふえている、社会のためにはたらく役所、など）

期待・問題解決（差別なく生活する——差別があるのでは——、老人・身障者の職業問題、老人も楽しく毎日をくらせるように、など）

以上のとおりであって、かなり多様な領域にわたって反応を示していることが理解できる。

小学校、中学校ともに社会福祉を即社会的弱者にかかわることがらを対象としてとらえている傾向が強く、全体の割合から見ると小学校で54.9%（老人ホーム・からだの不自由な人・援助保護・社会的弱者・老人・同情的感覚・生活保護の各割合の計）、中学校で49.8%（小学校と同じ各割合の計）と50%前後を占めていることが注目される。

小学校と中学校を比較すると認識の順位はほぼ同傾向にあるといえるが、ただ一つ、小学校で17位にある「期待・問題解決」が中学校にあっては上位の2位を占めているということに着目しなければならない。それは小学生に比して、単に量的に多いということだけではなく、中学校3年生の、かなり高度の社会認識——現実を厳しくみつめる——が、反応の質的背景として存在することを如実に物語るもので、内容的にはつぎのとおりである。

（内 容）

（実数）

- 老人福祉の問題…………… 11
 老後の保障（が徹底していない）、ひとりぐらし老人の不安の問題、など
- 社会福祉の日本の水準は低い…………… 6
 社会福祉はまだゆきとどいていない、十分徹底していない、日本の水準は低い、あまりなされていない、など
- 住民運動を…………… 3
 いまの政治に立ち向かう社会福祉の運動を、住民運動、など

- 社会的弱者に対する偏見……………2
老人・不自由者に対して冷たくみる、何らかのかたちで保障を受けている人に対する社会の偏見
- 障害者の労働・施設の問題……………2
重度障害者施設少なく彼らの働く場所がない、障害者施設を軽べつするみかたをなくすこと
- 社会組織、体制に関しての問題……………2
医者が少ない、緊急医療体制
- そ の 他……………7
独居老人の死、社会福祉に対する関心の低さ、町をきれいに、老人・不自由な人々の住みよいところを、など

計 33*

* 33の内訳は男子14 (42.4%), 女子19 (57.6%)

また、中学校で12位にある「社会的貢献」(小学校では14位)も小学生に比べてかなり具体的だ(施設訪問4, 奉仕3, ホームヘルパー1, 赤十字運動1, 文化少年団1, 計10)。

ところで、小学校、中学校ともに15位にある「自己との関連」についてみると、小学校では現実の施設、自己の希望、将来への考察などを述べている(前出)のに対して、中学校でのそれはたんに自己の経験を述べている(施設訪問の経験、施設へ寄付…何れも女子…)に過ぎず、またその実数はわずかに2で割合は非常に低い(0.8%)。この点は既にふれた中学校3年生の認識の高度性とは逆に問題性として把握しておきたい。思うに義務教育課程における学齢の上位は、必ずしも比例的・同心円拡大的に彼らのもつ「社会機能と自己との関連的認識」をより切実な問題として考えさせる志向的發展過程をたどっていないことを指摘しなければならない。またこのことを、社会機能の個人に対する、あるいは個人の社会機能に対する働きかけ、相互作用という面からみれば「今日の社会福祉の機能というものは、子どもたちの暮らしの中に十分定着していない」現実であることも、問題性の背景として承認しないわけにはいかないであろう。

実はこの点に関連しての、いまひとつの問題点がはらまれている。それは、小学校、中学校ともに回答率の低いことである。小学校33.9%, 中学校34.8%とほぼ同率を示しているし、完全無答者(ひとつも反応を示さない者)についてみても、小学校521名中225名(43.2%), 中学校254名中111名(43.7%)と同一傾向がみられることは関心をよぶところである。通念的にいって、小学校と中学校では、その間に子どもの意識のうえでの応分の格差がみられてよいはずなのに、それを見ることができない。(もっとも、小学校にあっては都市部と島しょ部の格差は例外を除いて歴然としている。例えば、完全無答者は都市部423名中166名(39.2%)に対し、島しょ部98名中59名(60.2%)と比率のうえでの開きは大きい。また、このことの原因も肯定できる。——後出——)

この調査に関しては、都市部の同一調査地域（A町）における子どもの社会福祉に対する量的意識反応は小学校（ここでは回答率36.8%，無答率—完全無答率のこと，以下同じ—39.2%）に比べて中学校（回答率34.8%，無答率43.7%）は低い。

〔Ⅱ〕 社会福祉に対する学習意欲（質問形式…あなたは「社会福祉」について社会科の時間などで、勉強したい、勉強したほうがよいと思いますか。——その理由もかんたんに書かせる——）

表2 社会福祉に対する学習意欲

	学習したいと思う	学習したいと思わない	無 答	計
小	404 (77.5%)	85 (16.3)	32 (6.2)	521 (100.0)
中	147 (57.9)	82 (32.3)	25 (9.8)	254 (100.0)
計	551 (71.1)	167 (21.5)	57 (7.4)	775 (100.0)

社会福祉に対する学習意

欲は予想に反して中学校が低い（「学習したいと思う」は57.9%で小学校と約20%の差）。

つぎに、この学習意欲について積極（学習したいと

思う）、消極・否定（学習したいと思わない）の両面をみていきたい。

表3 社会福祉に対する学習意欲（学習したいと思う理由）

小 学 校			中 学 校		
類 型	実 数	%	類 型	実 数	%
1 知的欲求	137	50.4	1 知的欲求	41	43.2
2 社会的有用	39	14.3	2 社会的有用	21	22.1
3 疑問解明	37	13.6	3 理解への期待	10	10.5
4 自己との関連	23	8.5	4 疑問解明	7	7.4
5 理解への期待	19	7.0	5 自己との関連	6	6.3
6 福祉重視の視点	8	2.9	6 そ の 他	10	10.5
7 そ の 他	9	3.3			
計	272	100.0	計	95	100.0

まず積極的に「学習したいと思う理由」についてみると（表3）、小学校、中学校とも、「知的欲求」、「社会的有用」が上位を占めて65%におよんでいる。

「知的欲求」では（知りたいから）、逆に（あまり知らないから）、やや積極的なものとしては（はっきり知ったほうがいいから）、（もっとくわしく知りたいから）、（もっと国のしていることを知りたい）、（もっと考えてみたい）、（みんなで考えなければならない）などがあり、また『しくみ』に関するものとして（社会のしくみが知りたい）、（社会福祉のしくみがわからない）、（社会保障の制度をもっと知りたい）、（どんな施設があるのか）、（社会福祉のしごとをすすめる役所のしくみをくわしく知りたい）などが小学校ではみられ、

中学校でも、単純に（知りたい）から（全体的によく知られていない）、（知らないことが多いから）、（知る必要がある）、さらに具体的に（現状をくわしく知りたい）、（具体的にどんなものか）などがあげられている。

「社会的有用」の項では、小学校にあっては（よく知っていたほうがよい、——便利——）、（大きくなって便利）、（社会にでてこまる）、（いざという時こまる）、（社会にでて役立つから）、（勉強のためになるから）、（世の中のため）等々や抽象的把握の傾向を示していることがわかる。

これに対して中学校では、（今後の生活に大切だから）、（知っていたら役立つかも……）（将来を考えて・ためになる）、（いいことだから）など小学校同様に漠然とした把握もみられるが、（困った人を助けなければいけない）と積極的姿勢をあらわすものもみられ（身近なことだから）として意識している傾向も見のがすことはできない。

「知的欲求」、「社会的有用」の項以外についても、当該項目の主たる内容を示すと下表のとおりである。

類 型	小 学 校	中 学 校
疑 問 解 明	<ol style="list-style-type: none"> 1. からだの不自由な人や老人たちはどんなことをしているか調べたい。 2. 便利な世の中になってもまだまだ苦しい人があると思うので。 3. 障害児の苦しさ（対策など）を知らないから。 4. ニュースなどでもよく聞き（社会福祉のことを）わからないから。 5. 社会福祉の役割など知りたいから。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の社会福祉がいきとどいていないから。 2. 恵まれない人々がいるから。 3. 社会福祉の活動がさかんでないから。
自 己 と の 関 連	<ol style="list-style-type: none"> 6. 私もそのようなものにお世話になると思うのもっとよく知っておきたい 7. とてもいいことだし、自分の老後に役だから。 8. からだの不自由な人の気持ちになって一しよに考えてみたい。 9. 大人になって子どもが身障だったらをを考えて。 	<ol style="list-style-type: none"> 4. 将来社会福祉を受けるかも知れないので内容を知っておきたい。 5. 自分たちも（例えば）老人ホームにお世話になるから知っておいたほうがよい。 6. 老後の自分が不安。 7. 将来、自分たちで成り立つのだから知っておくべきだ。 8. 自分とどういのかかわりがあるかわからないから。
理 解 へ の 期 待	<ol style="list-style-type: none"> 10. どんなことで困っているということがわかるから。 11. あまり考えたことがないから。 12. もっとほかのこともわかるかも知れない。 	<ol style="list-style-type: none"> 9. よくわかるため。 10. 社会のことに無知。
福 祉 重 視 の 視 点	<ol style="list-style-type: none"> 13. 社会福祉は国が強く主張しているから。 14. 社会福祉は人間にとってもっとも大切なものだから。 15. みんなが無関心だ。 	

みるように、各類型にかなりアグレッシブな内容のものがみられるのである。小学校1, 3, 8, 12, 中学校7などがそれだ。逆に受け身的な内容, 例えば, 小学校6, 中学校5などは前者と対極的に位置づく。また, 小学校9, 中学校6のように将来への不安感をもたらすネガティブな問題意識も存在する。

既にふれたように、中学生がかなり高度の社会認識を背景にもっていることとの関連において、最後の項の「福祉重視の視点」には中学3年生にふさわしい学習理由（意欲）が具体的に提示されてもよかったように思われる。

つぎに「学習したいと思わない理由」についてみていこう。

「学習したいと思わない」小, 中学校格差は小学校の16.3%に対して中学校の32.3%とほぼ1:2の開きがみられる（前出, 表2）ことを前提としておきたい。

表4 社会福祉に対する学習意欲（学習したいと思わない理由）

小 学 校				中 学 校			
類 型	実 数	%		類 型	実 数	%	
1 無 関 心	11	26.2		1 回 避	16	30.8	
2 回 避	8	19.0		2 無 関 心	13	25.0	
3 目 的 転 移	7	16.7		3 学 習 機 会	8	15.4	
4 理 解 困 難	6	14.3		4 理 解 困 難	6	11.5	
5 学 習 機 会	4	9.5		5 現 実 肯 定	4	7.7	
6 現 実 肯 定	4	9.5		6 目 的 転 移	3	5.8	
7 そ の 他	2	4.8		7 そ の 他	2	3.8	
計	42	100.0		計	52	100.0	

表4はその概要を示したものであるが、ここでは「無関心」、「回避」の2項が上位を占めている。

まず、「無関心」についてみると小学校では、社会科という教科目を意識し過ぎてか、社会科が（あんまりおもしろくないから）、（歴史以外のことはあんまり好きじゃない）と興味本位に反応したり、（なんとなく）という典型的な無関心さを示す。

これに対して中学校ではかなり否定的要素も加味され（自分に関係ない）と指摘し（興味がない）、（勉強したくない）と判断し、ひいては（別に知りたいと思わない）断定型も出てくる。

「回避」の理由はどうであろうか。小学校では（めんどくさい）が圧倒的に多い（実数8のうち7ですべて男子）。中学校での回避の根拠には小学校の場合のほかに現実の教科学習の条件が加わってき、（いまの授業だけで十分）であるとし、（教科書以外やらなくてもよい）、（これ以上内容がふえると困る）程の教科学習観もうかがえ、極端視しているかのように（別に習うものじゃないと思う）否定的見解が出されたり、（意味がない——施設がふえるわけではない——）とする学習の価値観・その有無についての自己決定も出

されている。

また現実社会においての実践の非力という立場に立って回避しようとする（いま勉強して、ぼくらの力ではどうにもならない）タイプや、（これをするとう業が長くなる）、（みんなまじめにやらないから）といった学習の方法論上の回避タイプもみられるところである。

「無関心」、「回避」以外の各類型の内容は下表のとおりである。

類 型	小 学 校	中 学 校
目 的 転 移	1. もう勉強したから他の必要な勉強を。 2. ほかのことをもっと勉強したい。	1. 社会だけでもむづかしいから。
理 解 困 難	3. よくわからないから。 4. あんまり意味がわからないから。	2. よくわからない。 3. 知らないから。
学 習 機 会	5. もっと大きくなってやってみたい。 6. 大きくなるにしたがってわかってくる問題だから。	4. 別に社会の時間にやらなくてもよい。 5. 別にいますることもない。 6. 自分自身よいと思えばやる。 7. こんなことは自主的にやるべきだ。
現 実 肯 定	7. いまはあまりすすまなくてもよい（社会福祉が）。 8. 設備が整っているから。	8. 知っている。 9. これで満足している。 10. 社会福祉はあればよい。

これに関して、小学校1と同3、4はあまりにも対称的であるし、また小学校3、4と中学校2、3はあまりにも共通的だ。

「学習機会」は小学校では時期尚早（5、6）の立場をとっているが中学校ではこれに自主的学習の要素（中学校7）が加えられている。また、「現実肯定」には、子どもなりの微視的、主観的、心情的な感覚がありありとうかがえるというものだ。

〔Ⅲ〕「社会福祉」学習テーマ（質問形式…「社会福祉について学習する」としたら、あなたはどんなことがらを学びたいと思いますか。じゅんばんに3つあげてください。）

社会福祉の学習を想定した場合の学習テーマは、回答率の低さ（後出）という問題点もあるわけだが、出されたテーマをまとめた表5（次頁）についてみると、小学校11項目、中学校9項目におよび極めて多様であることがわかる。

テーマ1（社会福祉の目的、概念、内容、機構、実態など）、2（領域別問題）の両項目で小学校は全体の44.9%、中学校50%と半数（近く）を占めている。

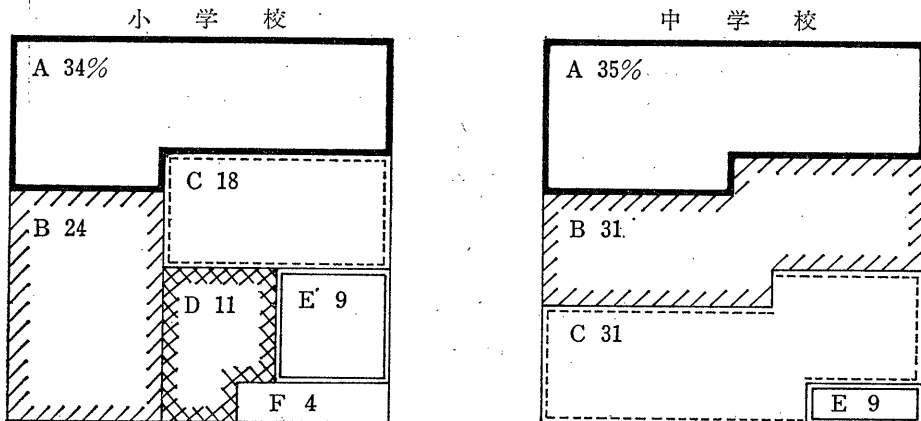
テーマ1についての内容分類では、A、社会福祉の目的・概念（社会福祉は何のためにあるのか、社会福祉とは何か、など）B、社会福祉の内容・働き・実態、C、社会福祉のしくみなどこれら3項目が主要部分をなす（小学校76%—A、B、Cの計—、中学校96%—同左—）——図1——。

テーマ2についての内容（図2）をみると、A～Eの5領域（このうちA～Cは小学校、中

表5 「社会福祉」学習テーマ(想定)

学 習 テ ー マ	小 学 校	中 学 校	計
	実数(%)	実数(%)	実数(%)
1 社会福祉の目的、概念・内容・機構・実態など	115 (32.7)	29 (26.9)	144 (31.3)
2 領域別問題	43 (12.2)	25 (23.1)	68 (14.8)
3 社会福祉の施設	40 (11.4)	16 (14.8)	56 (12.2)
4 対象者の実態	34 (9.7)	5 (4.6)	39 (8.5)
5 社会福祉の態度・方法・関心	32 (9.1)	2 (1.9)	34 (7.4)
6 国・自治体の社会福祉の対策	28 (7.9)	2 (1.9)	30 (6.5)
7 社会福祉の歴史	25 (7.1)	5 (4.6)	30 (6.5)
8 社会福祉の問題	17 (4.8)	23 (21.3)	40 (8.7)
9 社会保険	11 (3.1)	—	11 (2.4)
10 社会福祉労働	2 (0.6)	—	2 (0.4)
11 学習の方法	5 (1.4)	1 (0.9)	6 (1.3)
計	352 (100.0)	108 (100.0)	460 (100.0)

図1 学習テーマ1の内容分類



- A—社会福祉の目的・概念
 B—社会福祉の内容・働き・実態
 C—社会福祉のしくみ
 D—社会福祉の費用
 E—社会福祉の法律・行政
 F—その他

学校共通)に分類される。

心身の障害者を主としての、ハンディキャップをもつ人々いわゆる社会的弱者の問題が多くとりあげられている(A~D)ところに、子どもなりの社会福祉の対象把握が一般的共通傾向をもっているといえる。

このうち、量的には僅少であるが中学校Aに(原爆被爆者)、(公害患者)の問題が含まれていることに注目しておきたい。

図2 学習テーマ2の内容分類

小 学 校	A 障 害 者 (37.2%)	B 老 人 (18.6)	C 恵まれない人々 (27.9)	D 恵まれない人々の 職業・生活問題 (16.3)
中 学 校	(44.0)	(24.0)	(12.0)	E 政治のしくみ・今日の 問題、社会運動 (20.0)

また、中学校Eは(差別),(公害),>(赤十字運動)などの内容項目を含んでいる点、別個のパターンとして位置づくるものといえるだろう。

さて、そのほかの学習テーマについてはどのような内容がみられるのか、以下のとおりである。

表6 学習テーマ3以下の主たる内容 ()は実数, < >は%

テーマNo.	学習テーマ	小 学 校	中 学 校
3	社会福祉 の 施 設 (小40・中16)	1.施設の現状 (22) <55.0> 2.老人ホーム (18) <45.0>	1.施設 (9) <56.3> 2.老人ホーム (7) <43.7>
4	対 象 者 の 実 態 (小34・中5)	3.障害者の生活状況 (9) <26.5> 4.対象者の数 (その原因) (8) <23.5> 5.老人 (老人ホーム) の願い (8) <23.5> 6.現在、生活に困っている人々 (7) <20.6> 7.老人の社会福祉に対する考え (2) <5.9>	3.社会福祉を受けている人の生活 (3) <60.0> 4.社会福祉を受ける条件 (1) <20.0> 5.社会福祉を受ける人の立場 (与える人の立場) (1) <20.0>
5	社会福祉の 態度・方法・ 関心 (小32・中2)	8.一般の人々の社会福祉に対しての気持ち (みんなの協力) (10) <31.3> 9.幼児・老人・障害者(公害患者・交通遺児)のお世話、幸せにする方法 (10) <31.3> 10.募金の増額 (5) <15.6> 11.親切のしかた (2) <6.2> 12.社会福祉を行なううえでの工夫 (1) <3.1> 13.大きくなって何をすれば (1) <3.1>	6.われわれは何をなすべきか (2) <100.0>

		14. その他 (3) <9.4>	
6	国・自治体の社会福祉の対策 (小28・中2)	15. 国・自治体は (身障者・不幸な子ども・ひとりぐらし老人に) どのようにしているか (26) <92.8> 16. 国会の仕事 (1) <3.6> 17. 町はどのような努力を (1) <3.6>	7. 国はどんなことをしているか (2) <100.0>
7	社会福祉の歴史 (小25・中5)	18. 社会福祉の歩み (16) <64.0> 19. 今後の社会福祉の計画 (5) <20.0> 20. なぜ社会福祉ができたか (4) <16.0>	8. 今後の社会福祉 (4) <80.0> 9. 社会福祉の歴史 (1) <20.0>
8	社会福祉の問題 (小17・中23)	21. 社会福祉は役立っているのか (本当の親切) (9) <53.0> 22. 国の保障に対する納得 (問題の有無は) (5) <29.4> 23. 社会福祉をどうすればよいか (3) <17.6>	10. 外国との比較・先進国 (7) <30.5> 11. 社会福祉の普及度・地域による相違 (5) <21.7> 12. 社会福祉はだれが, どのように (5) <21.7> 13. 社会福祉の長短と問題点 (4) <17.4> 14. その他 (2) <8.7>
9	社会保障 (小11・中0)	24. 社会保障・医療保障・母子手当 (6) <54.5> 25. 社会保険・厚生年金・失業手当 (4) <36.4> 26. 公衆衛生 (1) <9.1>	
10	社会福祉労働 (小2・中0)	27. 社会福祉で働く人々 (2) <100.0>	
11	学習の方法 (小5・中1)	28. 図書研究・真剣に考える (2) <40.0> 29. 見学 (1) <20.0> 30. 未習事項 (1) <20.0> 31. 社会科で課題設定 (1) <20.0>	15. 施設 (老人ホーム) 訪問 (1) <100.0>

表中, 小学校, 中学校各 1, 2, また小学校 18, 19 と中学校 9, 8, さらに小学校 29 と中学校 15 は共通性をもっている (以下 No は学習テーマの内容の小・中学校 No を示す)。

社会福祉の対象者の立場に立っての問題意識は, 小学校 5, 7, 22, 中学校 5 などに見られるところである。とりわけ社会福祉を人間関係の側面から考察して, 心情的立場からもとりあげている中学校 5 のもつ意味は大きい。

一般に問題表現は抽象的であるけれども, 小学校 8, 9, 10, 11, 12 は中学校 6 に, また小学校 15, 16, 17 は中学校 7 に比して具体性に富んでいる。なかでも, 小学校 8 は, 社会福祉を国民全体の問題として考えていきたいとする発想の根底がうかがえる。このように, 努めて客観的に問題をとらえようとする態度は小学校 21 にみられる。

巨視的な立場からの問題把握としての中学校 10, 11, これに対して, 自分たちの地域社会に焦点をあてて問題をみつめていこうとする小学校 17, 何れも学習の価値観は内在する。

社会福祉の問題を、社会科の学習問題としてとりあげていこうとする子どもの積極的態度の一端を小学校31にみ、学習問題そのものではないが問題解決へのアプローチとしての手法を小学校28、29、中学校15などにみるわけだが、ここで、問題構成、調査研究、思考の深化、現場学習などの活動要素は、学習の方法が即社会福祉を学びとるという学習の目的に直接的・間接的に結びつくという点で重要な意味をもつ。われわれはこのことを軽視してはならない。これはひっきょう、学習の方法を主体的に学びとるという学習の本質観に根ざした考え方なのである。

ところで、項目1「社会福祉に対する感性的認識」においてもふれたことがらであるが、回答率の低さ（項目1では小学校33.8%の中学校34.9%）がここでは顕著にみられるのである。したがって無答率においても、50%以上（小学校55.1%）をはるかに上まわっている（中学校72.1%）のである（表7）。

（なお、参考までに小学校の回答率、無答率を都市部と島しょ部にわけて比較してみると、回答率では都市部24.7%〈回答実数313〉、島しょ部13.3%〈同39〉で11.4%の差がみられる。無答率では、都市部が423名中217名で51.3%、島しょ部が98名中70名で71.4%、両者の差は20.1%。この現象は都市部と島しょ部の地理的条件や社会的条件の相違に起因して、子どもに与える、あるいは子どもが求める刺激の強弱、社会的関心・意識の高低の

表7 調査Ⅲに対する回答の量的内訳

項 目		学校種別	小 学 校	中 学 校
A	調査対象児童・生徒数		5 2 1	2 5 4
B	要 回 答 項 目 数		3	3
C	回 答 数	3 項 目	人 数 (%) 3 0 (5.8) 回答数 (%) 9 0 (25.6)	人 数 (%) 9 (3.5) 回答数 (%) 2 7 (25.0)
		2 項 目	人 数 (%) 5 8 (11.1) 回答数 (%) 1 1 6 (32.9)	人 数 (%) 1 9 (7.5) 回答数 (%) 3 8 (35.2)
		1 項 目	人 数 (%) 1 4 6 (28.0) 回答数 (%) 1 4 6 (41.5)	人 数 (%) 4 3 (16.9) 回答数 (%) 4 3 (39.8)
		無 答	人 数 (%) 2 8 7 (55.1)	人 数 (%) 1 8 3 (72.1)
		計	人 数 (%) 5 2 1 (100.0) 回答数 (%) 3 5 2 (100.0)	人 数 (%) 2 5 4 (100.0) 回答数 (%) 1 0 8 (100.0)
D	回 答 率 $(\frac{C}{B \times A})$		2 2 . 5	1 4 . 2

存在をものがたるものである。)

このような低位傾向の前提には、項目Ⅱ「社会福祉に対する学習意欲」において、既に、「学習したいと思わない」子どもが小学校で85名、16.3%、中学校で82名、32.3%存在していたことも見逃がせない事実である。

ちなみに、この「学習したいと思わない」子どもで、項目Ⅲを「無答」としたケースの学校差などはどうであるかをみると、小学校では85名中57名、67.1%、中学校では82名中77名、93.9%と、中学校をはるかに高い。また、この小学校57名、中学校77名は小中学校別無答全体の19.9% (小学校)、42.1% (中学校) にあたり、ここにも中学校の高率がみられる。さらに、「学習したいと思わない」が項目Ⅲでは問題を表記している (学習意欲はないが問題意識はもっている) ケースについてみると、小学校が85名中25名、29.4%に対して中学校82名中6名、2.4%の低率で、小学校、中学校では大きな開差がみられる。

何れにしても「学習したいと思わない」子どもが学習問題設定の場においても「無答」としか反応しない関連性と、反応の低さにみられる意外性を中学校にみることができる。

以上、回答率の低さを2, 3の視点からみてきたわけであるが、ここでの問題点を集約すると、

- (1) 今日、社会福祉の用語、内容はかなり日常生活のなかで用いられ、マスメディアによってもとりあげられるなど、政治的にも社会的にも多面的、多義的な問題をもつようになってきたにもかかわらず、これを学習問題としてとりあげようとするとき、小学校、中学校の最高学年では一部の子どもを除いては難解な社会機能でしかないのかという問題がある。しかし、もしこのことを肯定的に承認するならば、小学生と中学生の回答反応などは比率のうえですべて逆の結果になったはずであろう。ここに一つの問題性があるように思われる。
- (2) 調査Ⅰでみたような無目的な、感性的社会認識とはちがって、社会福祉のフレームの中に自己をおき、そのうえで問題を自らが創出していくというその過程に大きな抵抗がみられる。

既に表6 テーマ No11 (P38) の考察において学習の方法を主体的に学びとる有意性が学習の本質観に基づいているものであることを指摘した。思うに学習問題を自らつくりだしていくという自己活動はそれ自体重要な学習機能なのであって、この前提的過程を経ずして自主的な学習活動はあり得ないとさえいってよい。したがって教育の場は、つねに学習者が問題発見や問題解決のための環境構成、彼らの問題解決のための思考訓練を手助けするためのゆきとどいた配慮を怠ってはならない。

このような手だてがつねに整備されるなかで、学習者、子どもたちは徐々に「自分(たち)で問題を発見し、それらの問題を組み立て、順序だった過程をふんで問題(のひとつひとつ)を解決して新しい認識を得る」ようになるものなのだ。

こうした学習経験の積み上げが今日の学校教育では十分に保障されていない。戸惑い・無関心・無感動・無反応はいつてみれば、今日の誤った教育過熱の最大の犠牲者である多くの子どもたちのプロフィールでもある。

この項でみた、咄嗟に反応し得ない能力の欠如は、極言して自主的問題解決のための学習経験や思考訓練の不足等によって招来されたものとみたい。

〔Ⅳ〕「施設訪問についての意見」に対する態度（質問形式…ある学級会でつぎのような意見がでました「老人ホームへいっておじいさんやおばあさんといろいろお話をしよう」、あなたはこの意見についてどう思いますか…以下略…）

この項では上記質問について表8にみるような8つ（イ～チ）の選択肢を設定してその何れかに反応させた。結果（表8）をみてわかるようにここでは無答は僅少である。

小学校では自己決定の態度は積極的なイ（47.8%）を含めて（イ，ロ，ハ）373（71.7%）

表8 施設訪問意見に対する反応

反 応 類 型	学 校 種 別	
	小 学 校	中 学 校
イ 自 分 も 賛 成 意 見 を の べ る	249 (47.8)	46 (18.1)
ロ 賛 成 だ が 意 見 は の べ な い	79 (15.2)	73 (28.7)
ハ 賛 成 だ が 反 対 意 見 が 多 け れ ば 友 だ ち と 一 緒 に い っ て み た い	45 (8.7)	19 (7.5)
ニ 賛 成 で も 反 対 で も な い , 多 数 決 に し た が う	46 (8.8)	45 (17.7)
ホ 反 対 だ が 賛 成 意 見 が 多 け れ ば そ れ に し た が う	5 (0.9)	10 (3.9)
ヘ 反 対 意 見 を の べ る	5 (0.9)	7 (2.8)
ト よ く わ か ら な い	73 (14.0)	43 (16.9)
チ そ の 他	4 (0.8)	4 (1.6)
リ 無 答	15 (2.9)	7 (2.8)
計	521 (100.0)	254 (100.0)

が賛成、逆に反対の立場をとるものはホとヘで10（1.8%）、2%にも満たない。ニ・トの多数決従属・不明は119（22.8%）を占めている。

中学校ではロが1位にありイは2位ながらかなり低く46（18.1%）、これらを含めて賛成は138（54.3%）、反対は17（6.7%）、多数決従属・不明は88（34.6%）となっている。

純粋に賛成意見をのべるイの小中学校差は29.7%とかなり開きがあるが、これが示すように中学校全般にみられる消極性是否定し得ない。老人ホームへ行ってお年寄りと話そうという具体的問題に対する、自己決定の態度の曖昧さ（ニ・ト）は小学校都市部21.0%（89/423）、小学校島しょ部31.3%（30/96）、中学校34.6%（28/254）という状況で学校差が注目されるところである。

チ（その他）では、（反対意見をのべ決まっても参加しない）、（迷惑でないのなら賛成

する)一小学校一、(関係ない)、(賛成だがいかない)、(ホームの人が喜んでくれるのならいってもよい)一中学校一など、自己中心型と対象尊重型の対称的な2つのタイプがみられる。

〔V〕 社会福祉施設・機関に対する認識(質問形式…「老人ホーム」のような社会福祉の施設や社会福祉のしごとをすすめる役所について、あなたの知っているものがあればあげてください。…5つあげさせる…)

小・中学生がどの程度社会福祉資源を知っているかみたものである。奇しくも、小学校、中学校とも全くといっていい程同位の有効回答率を得た(以下表9参照)が、その低率ぶ

表9 社会福祉施設・機関に対する認識の内容

学 校 種 別		小 学 校	中 学 校	備 考
機関・施設等				
行 政 機 関	国	28 (12.0) ^④	2 (1.7) ^④	①正式な名称ではないが、このままとりあげた。 ②小学校都市部B区に実在する障害児施設である。 ③児童公園という表記はごく少数であったが一応ここでは児童公園と解釈したい。 児童福祉法では「児童遊園」の語を用いている。
	地 方	71 (30.4)	22 (19.3)	
保 育 所		7 (3.0)	14 (12.3)	④ $\frac{\text{回答数の計}}{\text{児童生徒数} \times 5}$ ⑤全く回答しない児童・生徒の人数 ※回答の中にはかなり老人ホームもあがっていたが、発問の中ですでにあげたので削除した。
乳 児 院			1 (0.9)	
母 子 福 祉 施 設 (母子寮センター)		1 (0.4)	5 (4.4)	
養 護 施 設		9 (3.8)	3 (2.6)	
(孤 児 院) ①		58 (24.8)	22 (19.3)	
(恵まれない、親のない子ども施設)		6 (2.6)	2 (1.7)	
障 害 児 者 施 設		9 (3.8)	10 (8.8)	
(K 学 園) ②		16 (6.8)	10 (8.8)	
(児 童)公 園 ③		17 (7.3)		
身障者更生援護施設・センター			6 (5.3)	
点 字 図 書 館			2 (1.7)	
救 護 施 設(社 会 復 帰)			1 (0.9)	
老 人 住 宅		1 (0.4)		
老 人 福 祉 セ ン タ ー			1 (0.9)	
移 動 浴 槽 車		2 (0.9)		
社会福祉センター・会館		9 (3.8)	11 (9.6)	
被 爆 者 福 祉 セ ン タ ー			1 (0.9)	
社 会 福 祉 協 議 会			1 (0.9)	
計		234 (100.0)	114 (100.0)	
有 効 回 答 率 ④		8.98	8.97	
無 答 ⑤		319 (61.2%)	172 (67.7%)	

りは、無答率の高いこと（小学校61.2%，中学校67.7%）とあわせて、やはりひとつの問題として把握しなければならないであろう。

無効回答は小学校で135（5.2%）——修道院，養護学校等特別学校・学級，病院，職業安定所など——，中学校で43（3.4%）——養護学校等特別学校，職業訓練校，職業安定所など——をみた。

有効回答の内容をみると小学校では行政機関が40%台で半数に近いが，これは「厚生省」，「県庁」，「市役所」，「役場」などを指しているのであって抽象的把握の域を出ていない。

つぎに「孤児院」が中学校とも共通して全体の中で高い割合を占めている（24.8%で2位，中学校で19.3% 1位）。およそ今日この用語は社会福祉の領域ではもとよりのこと社会通念のうえからも漸次死語化しつつあると思われるのに，子どもたちへのかなり短絡的なインフォメーションが存在していたものとみたい。また，これは「養護施設」（9，3.8%）とはっきり答えているのと対称的だ。

（ここで，「養護施設」，「孤児院」の都市部，島しょ部比較をみてみると，「養護施設」，「孤児院」両者の回答比は都市部23.3%（回答数49），島しょ部75.0%（同18）となっており，島しょ部ではこの両者の占める比率が高い。児童数全体からの比率をみても，「養護施設」では都市部が0.09%（4/423），島しょ部5.1%（5/98）。「孤児院」では都市部が10.6%（45/423），島しょ部13.3%（13/98）と，どちらも島しょ部が高い。調査対象地のこれら都市部，島しょ部にはもちろん当該施設は存在していない。何れにしても島しょ部における，この両者に対する集中と都市部に比し高率の反応を，傾向の特異性として注視しておきたい。）

「K学園」については備考で補足しているとおりであるが，同じ都市部同一町内小学校にあっては学区も異なるためかA区の回答はゼロであった。

子どもたちが身近にとらえているものとして「公園」（17.7.3%——備考参照——）があげられるが児童福祉施設としての児童遊園を意識しての回答であるかどうかは確かな根拠を見出せない。

量的には僅少であるが特殊なとりあげ方をしているものとして目を惹くものに「移動浴槽車」（2，0.9%），「老人住宅」（1，0.4%）がある。

中学校ではどうであろうか。まず回答（数）の男女差は男子が72で12.2%，これに対して女子は42で6.2%，6%の開きがみられ女子が低い。

行政機関は小学校と全く同じ内容のものであるがみるように回答も低く（24，21.0%），質的には福祉的感触は全く得られない（小学校—都市部—においてすら「役場の生活保護課」と答えたケースがある）。

「公園」（0）が出てこないのは，中学生の日常生活とのかかわりの有無という観点からも肯定できる側面をみるようだ。反面，中学校における特色（量的には僅かだが）は小学校ではみられなかった「乳児院」，「身体障害者更生援護施設・センター」，「点字図書館」，「救護施設（回答では「アルコール中毒患者の社会復帰の施設）」，「老人福祉センター」，「被

爆者福祉センター」,「社会福祉協議会」等,社会福祉施設や団体の専門のセクションが回答されている点である。これらの回答の根拠は明らかではないが,マスメディアからの影響,あるいは家族,近親者,近隣にボランティア活動に従事している人からの刺戟等そのひとつではないかと推測される。

なお,有効回答とは目されないが関連的回答として許容される(実在しないものもあるが)ものとして「児童保護所」,「保護施設」,「少年院」,「相談所」,「リハビリテーション」,「夜間治療センター」,「車いすなどの人のためのアパート」,「ホームヘルパー」,「点字づくり」(以上小学校),「保健所」(小中学校とも一小学校4,中学校2一),「身体障害者福祉事務所」(中学校)各1がみられた。

この項における問題点として,

- (1) 社会福祉諸資源に対する理解度は極めて低く,社会福祉の機能が地域社会や家庭ならびに子どもの生活の中に切実味をもって具現され密着していないから,自己とのかかわりが無縁のものとして無視したり軽視する傾向があるように思われる。とりわけ児童福祉の観点からみればその着眼は弱い。
- (2) したがって社会福祉という一般社会現実がそうであるように,どうしても何らかのハンディキャップをもつ人々を対象としてしか考えようとしなからここでも社会福祉と自己との関連が断ち切られる(このことがらは,これからの社会福祉教育,とりわけ学校における社会福祉教育を展開するうえでの課題性をもつものである)。
- (3) 児童相談所や福祉事務所など福祉行政機関の名称,機能は子どもの生活経験の範ちゅう外,社会的意識外の問題であるようだ[(1)とも関連]。中学校女子にみる「知りません,しかし知りたい」のもいつわりのないひとつの現実といえる。

〔VI〕 老人,障害者の住みよい町実現への方策(質問形式…「おとしよりや,からだの不自由な人たちもすみよい町」にするために,あなたはいまどんなことをしたらよいと思いますか。じゅんばんにあげてください。…3つあげさせる…)

質問形式にみるように,具体的な回答を期待したが,小学校116名(22.3%),中学校106名(41.7%)は無答であった。回答の総計は965(児童・生徒数計775名)であるから小・中学校あわせてひとり平均1.2の回答ということになる。

回答内容(方策)を類似のパターンにわけると,およそ11の項目に分類された(表10)。

小学校と中学校では回答の序列にちがいがみられるが,子どもなりの郷土意識や郷土に期待する福祉的施策の概要は把握できるというものだ。上位の①,②,③で小学校(63.0%),中学校(62.2%)ともにほぼ同率で60%台を占めていることがわかる。

まず①についてみると,(気がるに挨拶)や(席ゆずり),(横断歩道の手つなぎ)など(やさしく),(いたわる)という(小さいところまで気を配る)いわば(保護する)(心かけ)で(明かるい手をさしのべる)等々。また(盲人道路をふざけてとおらない)で

表10 「老人・障害者の住みよい町」への方策

方 策		学 校 種 別	小 学 校	中 学 校
①	老人・障害者に親切にしたり、親身になって考え行動する	%	205 (28.1)	52 (22.1)
②	町の清潔，無公害，交通安全につとめる		139 (19.0)	26 (11.1)
③	町の施設・設備の新設，改善充実をはかる		116 (15.9)	68 (29.0)
④	老人・障害者の施設，病院の建設・改善をはかる		87 (11.9)	16 (6.8)
⑤	ボランティア活動をすすめる		66 (9.0)	8 (3.4)
⑥	老人のすみよい町にする		42 (5.8)	12 (5.1)
⑦	経済的援助，保障をする，権利を高める		24 (3.3)	20 (8.5)
⑧	差別や偏見をなくす		24 (3.3)	19 (8.1)
⑨	老人・障害者についての啓蒙をはかり関心をもたせる		10 (1.4)	1 (0.4)
⑩	老人・障害者へのサービスをはかる		9 (1.2)	8 (3.4)
⑪	老人・障害者のための組織づくりや行事を行なう		8 (1.1)	5 (2.1)
計			730 (100.0)	235 (100.0)

（目の不自由な人の邪魔をしない）よう（もう少し考えてあげる），（おとしよりや不自由な人のことを考えて行動する）よう（自分たちも反省する）としている。（人びとの親切心）〈中学校〉にかける期待も出されている。

②では，小学校が「公害のない町」(65)，「清潔な町」(54)，「交通安全」(20)であるのに，中学校では「交通安全」(10)，「自然環境をよくする」(9)，「清潔な町」(4)，「公害のない町」(3)と順位が逆になっている。

③であげられた具体的な施設・設備は，「福祉会館」，「運動場」，「スポーツセンター」，「安全な公園」，「休憩所」，「庭」など。「歩行者道」，「横断陸橋」，「横断時の音楽」，「横断時間の調整（長く）」，「専用手すり」，「ゆずり合いの席」，「車いす」，「電話」，「非常ベル」，あなどである。

④（身障者のための），（よい施設をつくる）が多く，ついで（老人ホームをつくる），（ふやす），（設備をよくする）。（からだの不自由な人をいれる），（病院をつくる）などをあげている。中学校では（老人ホームをつくる）が多く，それも（近所，家族との交わり），（子どもらが気らくにいけるような）（場所を考えた）要素が含まれている。また，（老人ホームの入居制限廃止）といった特異な回答もみられた。

⑤（からだの不自由な人の行事——例，運動会などを援助）——⑪と関連——するほか，（老人ホームの訪問）を（子ども会などで）したり，（家庭訪問）を（ボランティア）——（お手伝いにいく），（そうじ），一のかたちで行なったら，それに（自然に恵まれた所へ連れていってあげる）家庭外志向型，さらには（世話する人をふやす）資源確保型もあ

げられている。

中学校では（不自由な人たちに）、（団体による協力）が主であるが、反応の低さが目だつ。

- ⑥ 具体的には（娯楽施設）、（ただ電話）、（火災報知機）など施設、設備の面をあげるほか、老人に（静かな所）をという住環境の面、（老人に活気を）、（生きがいを）とする心理面、（老人にも職を）の社会面、（老人の健康）に意をはらって例えば（健康調査をする）身体面など。このほか社会的に寄与する立場からの（としよりの意見を聞く）、実態を把握するための（アンケートをとる）ことからさらに進んで（老後対策に力を）といった行政にかかわる面も出されている。

このほか、家族関係については（若い人も一諸に住む）、中学校でも（身内の者がめんどうをみる）ように（家庭内の助けあい）ひいては（親切な人間づくり）が提示される。

- ⑦ （募金）、（寄付金）のほか（県や国から補助金を）求め、保障の点では、（年金）問題、（医療費の無料）と（十分な治療を）、また、（すまいをただで）といった完全保障にも及んでいる。中学校でははっきりと（福祉の予算をふやす）ことによって（ヘルパー）や（施設保母）の確保などが主としてあげられ、ついで、（年金の増加）問題も、さらに、関連するかのよう（に防衛費をへらして）とする前提的条件もみられる。

- ⑧ （普通の人と変わらない生活ができるように）、（同じようにあつかう）、（ちがった目で見ない）こと、教育面では（差別なく義務教育を）、（からだの悪い人も同じ学校に入れてあげたい）などの、さらには（からだの不自由な人でも働けるようにする）といった平等性や機会均等性といった民主的要素がみられる。中学校でも（偏見）、（白眼視）、（べっ視しない）が多く、そのために（差別をしない）（正しい人間観）、（平等な理解）といった人間関係の基本的態度の面が出され、小学校でも出ていたことの発展として（からだの不自由な人たちにも就職を）、（訓練を）、さらに注目されるのは（働けなくても生活の保障を）、と同時に（福祉を受ける権利を高める）とする認識である。

- ⑨ （親切にするように）、（町の人の協力を）得、（親切な人をふやす）、（みんなへの呼びかけ）を訴え、（その人たちの気持ちになって考え）、（その人たちの苦勞を知ってもらう）など、また（老人や不自由な人のいうことを聞く）、つまり（その人たちの経験）を聞かせ関心をもたせる）ことを指摘する。中学校では側面的に（施設のPR）というかたちで出されている。

- ⑩ （つきそい）や（ホームヘルパーをたくさんつける）、それは（健康な人が）あたるとし、（給食）、（入浴サービス）なども内容としてとりあげられる。中学校ではこれらのほかに（盲導犬）や（独居老人の世話）が出されていた。

- ⑪ （老人や障害者の集まる会をつくるとよい）、（老人・障害者・町の住民が一緒に何かできる会をつくれればよい）、（おとしよりや不自由な人を守る会をつくる）の順で、何れ

も組織づくりとその働きへの期待感をのぞかせている。これに対して中学校の場合は端的に、(ごらく集会)、(老人大学)と答えている。

調査結果についての総合考察はすでに冒頭において述べたとおりであるが、もとよりこの結果を客観的な実態とみることは避けなければならないが「問題としての社会福祉意識傾向」の素地は大まかながら把握し得たように思う。

子どもの社会福祉観の確立を願う、小・中学校における福祉教育の本質的な意図と具体的な構造内容、あり方の追究、それは「子どもの社会福祉観とは何か、その啓培に資する子どもの生活や学習の土壌は、どこで、どのようにして耕されることが好ましいのか」といった視点に立っての課題究明にもなるわけだが、そのための多角的考察や作業展開をすすめるうえで、この調査結果もひとつの媒体として位置づけていきたいと考えている。

この調査に心よく応じていただいた広島県の関係小中学校の片山明則、寺上伸之、木下義明、津国恒雄各校長先生ならびに、調査手続上、終始斡旋の労を惜しみなくとっていただいた同県の向台博先生に厚く謝意を表するものである。

なお、この研究報告は日本社会福祉学会第24回大会(昭, 51, 10, 23, 於福岡市)における発表に加筆したものである。